

CURES Salon

真夏の夜の八つ当たり

林 宥 一

- 「この野郎」パソコン相手に罵声飛ぶ
汗だくのコピー資料もすぐにゴミ
OA化進むにつれて仕事増え
(『平成サラリーマン川柳傑作選』第1
集、第2集、講談社)
- この10年ほどの間、学生から受けてきた
一番多い質問は、「レポートはワープロで書
いてもいいですか?」、「卒業論文は手書き
でなくてもいいんですか?」という学問外的
質問だ。「いいよ」と答えると、ホッした顔
をしながら、ちょっと意外な表情をみせる。
そこで小生、「どうしてそんなことを聞くの
か?」と逆に尋ねると、「先生はワープロや
パソコンを使うとレポートや卒論を受け付け
ないと聞きましたので」と言う。小生「誰が
そんなことを言ったのか?」。学生「何人か
の先生が講義でも言っていました」。小生「オ
レが使わないだけの話だ。他人に強制するつ
もりはない。そんな噂を流すとはケシカラ
ン!教授会で抗議する」。
- 今日まで教授会ではまだ抗議をしていな
い。もう手遅れだ。自分もワープロを使い始
めたから。
- しかし、それにしても、言語処理機(ワ
ード・プロセッサ)とか小型電子計算器(パ
ーソナル・コンピューター)を使うこと・使
わせられることに対して、(他人から見れば)
異常な抵抗感・嫌悪感を抱いてきたことは事
実だ。理由は色々あるが、いちばん大きいの

は、人間が身につける技術の変化ということ
への抵抗だ。変化についていけないだけの話
ではないか、と言われるかもしれない。そう
言いたければ言わせておくが、私だって技術
の進歩を全面否定しているわけではない。だ
が、その速度が速すぎる。せめて一世代単位
ぐらいにしてほしい。一つの技術を習熟した
とおもったら、数年でまた新しい水準のもの
を覚えなければならない。それを覚えたと思
ったら、さらにまた…。長くない人生、それ
だけで一生が終わってしまうのではないか。

「そうは言っても、とても便利」。これが
常套句。便利、便利、便利。だが一体それが
何だというのだ。NOT ONLY ECONOMIC
ANIMAL, BUT ALSO TECHNOLOGICAL
ANIMAL

- この10年、新しい道具の普及と社会との
関連に、それなりに(ゆがんだ)関心を持ち、
それなりに(横目で)注意を払ってきたつも
りだ。新聞のきりぬき、雑誌や文献からの関
連記事の手書きメモ、あらためて整理してみ
たらかなりあった。その中に、私の所属する
学会が発行している機関誌が、投稿規定を変
えたことに関する記事がある。編集後記から
の抜き書きである(『歴史学研究』1988年8
月号)。

「ワープロによる原稿は、ある意味で本来
の「原稿」の概念を根底から変えてしまう危
険性をもっている。すなわち、手書きと異な

り、ワープロで原稿を書く限り、ただ一つしか存在しないという「原稿」の本質的意味がなくなってしまうのである。誰が、何時、如何なる文章を書いたのかを確定する手段は、ワープロ原稿ではなきに等しいのである。偽作、盗作、剽窃の可能性は拡大し、原稿の個性もなくなり、後世の歴史家の苦勞が今から眼に見えるようだ。それにもかかわらず、『歴史学研究』の投稿規定を、ワープロ原稿を含めた規定に変更せざるをえなかった。…時の流れか。]

歴史(時)と向きあう歴史家が、「時の流れか」とつぶやく姿、これは一種の喜劇(または悲劇)だ!—10年前の私は、そう考えながら、この部分をノートに写しとった。しかし、「時の流れ」によって、その私も今では「ワープロ」を使っている。

● しかし、10年たって、「ワープロ」がどうのこうのという時代は、もう古くなったらしい。10年前には、「ワープロ利用調査/サラリーマンの半数がともかくも操作できます/使えぬととり残される」(『朝日』1988・8・24)などという記事がしばしば見られたものだが、この2、3年は、「パソコンできないと就職できない?学生オロオロ」(同1996. 1. 3)、「どうするオジサン/寂し悩ましパソコン時代/若者に置いていかれる…」(同1996. 1. 4)だ。

● だが、このパソコンとそれを使ったインターネットというコミュニケーションは、単なる言語処理機としてのワープロとは比べものにならないほど、大きな力をもっているらしい。それは、個人の生活を便利にし快適にするだけでなく、地域や国境を越えたつながりを可能にし、全く新しい人間関係を創りだしていくのだそうだ。ネットワークとシチズンを結びつけたネチズンという言葉が生まれ、

マルチメディア市民革命というべきものが現実社会の矛盾を解決する「革命」に取って代られるかもしれない、という議論さえある(「国境をこえた民主主義の夢」、『朝日』1996. 3. 5)。

● ここまで言われると、歴史学で社会運動を勉強してきたものとして、心穏やかではない。そこで、関連の本をのぞいてみた。予想以上にスゴイ。スゴイというのは、パソコンやネットワークそのもののことではなく、著者の信仰心のことだ。

「パソコンはいろいろな用途に使えるすばらしい機械です。仕事の場でも、勉強にも、家庭生活にも、趣味にも、役に立ちます。21世紀の高度情報化社会になれば、だれでもパソコンを使うのはあたりまえということになるでしょう。」(石田晴久『パソコン自由自在』、岩波新書)

「インターネットは、人間の倫理とか思想といったものにまで、広範な影書を与える可能性が見えはじめています。そしてその議論自体が、従来のような権威をもった組織によってではなく、世界中の個人たちが主体となって進められているというのが、インターネットの特徴です」、「いまではデジタルテクノロジーが、教育、経済、倫理、民主主義、思想など、幅広い人類の活動と関わるようになっていきます。そうである以上、その研究や開発、システムづくりなども、あらゆる分野の人間が協調して進めていかなくてはならないと思います。

「あらゆる分野」というのは、それぞれの学問分野という意味だけではなくて、産業、大学、行政—いわゆる産・学・官の協調—も強く進めていかなければならないという意味でのことです。インターネットは絶対に役に立つと、私自身は確信しています。」

(村井純『インターネット』、岩波新書)

● 人類の未来はインターネットがにぎっている、といわんばかりの主張だ。言いたいことがたくさんあるが、最低2つのことは書いておく。

1つは、クリフォード・ストールの『インターネットはからっぽの洞窟』（倉骨彰訳、草思社）でも指摘されている。これは上の石田さんや村井さんにもピッタリあてはまる。「彼らは、コンピュータとネットワークでよりよい社会が実現できると信じているが、この技術信奉心こそが、彼らの売り込もうとしているシリコン製の万能薬の主たる薬効成分なのだ。だから彼らの頭のなかでは、コンピュータとネットワークで情報にアクセスでき、コミュニケーションが改善され、いろいろなプログラムが使えるようになりさえすれば、社会問題は一挙に解決され、よりよい社会が実現されるという筋書きができあがっている。しかし、そもそも科学技術で解決できるような社会問題などあるのだろうか。彼らの言うことは真に受けられないほうがいい。」

● もう一つ、インターネット社会論に特有なのは、地域をこえ、国境をこえ、瞬時に地球上の諸個人がつながるといふ空間的社会論である。地理的・空間的制約をいとも簡単に越えられるところにできる人間と社会の関係ということだ。当然だが、そこには時間の流れ・歴史論がない。ところが、人間とその社会を制約するもう一つの絶対的条件は時間なのである。インターネット信奉者の議論には、この自覚が欠如している。

「人間が機械によって助けられることは絶対にあり得ない。何故といって、機械は人間を永遠の一瞬間であるあの時間から拉し去るのだからである。持続的にうごく機

械は時間から一種の機械化された持続を製造する。そしてこの機械的持続のなかでは、永遠にむかって歩み寄ることの出来るような自存的な瞬間は存在し得ないのである。この機械的な持続は、時間に対しておよそ如何なる関係ももってはいない。それは時間を充たすのではなく、空間を充たすのである。時間は凝固して、硬くなって、空間に変じたもののようにみえる。

このようにして、人間は時間から隔離されているのだ。だから人間は機械のまえでこんなにも孤独なのだ。そこでは人間は一種の空間的存在にすぎない。そして時間が動いて行くかわりに、機械の運動によって空間だけが動いていくようにみえる。」

(ピカート、佐野利勝訳『沈黙の世界』、みすず書房)

● 最後にヴァーチャル・リアリティについて。コロンビアの作家ガルシア・マルケスの『百年の孤独』（新潮社刊）という作品のなかに次のような場面がある。ある村で裕福な商人が活動写真を持ち込んで村人に見せた。映画のなかで主人公が死んで、埋葬される場面に、村人たちはその不幸に同情して涙を流した。だが、次の映画のなかで、死んだはずの人物がアラビア人に姿を変えて生き返った。主人公の運命に一喜一憂していた観客は、とんでもないインチキに怒りだし椅子をめちゃめちゃに壊し始めた。「みせかけだけの不幸なんてまっぴらだ。おれたちにはそんな余分な涙はない。現実の不幸で十分だ」、村人たちはそう思ったのだ。ヴァーチャル・リアリティという言葉を知った時に、私は、このくだりを思い出す。永遠の時間のなかで人間の生と死をふくむあらゆる現実は一回限りで、やり直しのきかないものだ。

(金沢大学経済学部教授)